

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01080

研究課題名（和文）骨角製装身具類の包括的検討からみた縄文から弥生への時代変遷の解明

研究課題名（英文）Elucidating the transition from the Jomon to the Yayoi period through a comprehensive study of accessories and ritual equipments made from bones, horns, teeth and shells

研究代表者

川添 和暁（Kawazoe, Kazuaki）

明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員

研究者番号：40869202

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：狩猟採集社会の縄文時代と水田稲作農耕の弥生時代とは、これまで対照的に扱われることが一般的であった。今回の研究課題では、狩猟・漁撈などの生業と有機的関連性のある骨角製装身具類を、両時代同等に取り上げることにより、縄文時代から弥生時代への時代変遷を改めて検討した。骨角器といえば漁具を対象とした研究が圧倒的に多く、装身具類を主体とした包括的研究自体、そもそも稀少である。分析の結果、縄文から弥生への変遷は決して断絶ではなく、縄文時代以来の伝統を引き継ぎつつ、新しい社会的枠組みを示す新たな器種の登場など、弥生時代でも狩猟・漁撈などに基づく価値観が、継続して機能している様相を確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の課題では、考古資料としても包括的に取り上げられる機会が稀な資料群について取り上げたという基本的な点において、型式学などを基にした従来の考古学研究にはまだ進めなくてはならない分野が多くあることを示すことができた。

また、今回の分析結果を見ると、先史時代の様相を、均一化・単純化してまとめることは難しいことが分かる。「歴史は時代を見る鏡」と言われるように、社会の多様化が尊重される現代である。人間社会の理解において、一般概念を広く適用するのではなく、地域・時期に即した理解が特に必要であることを、本課題では示すことができたものと考えている。

研究成果の概要（英文）：The Jomon period, with its hunter-gatherer society, and the Yayoi period, with its rice paddy farming, have generally been treated in contrasting terms. In this research project, bone and antler implements, which are organically related to hunting, fishing, and other subsistence activities, were examined equally in both periods, and the transition from the Jomon to the Yayoi period was reexamined. The overwhelming majority of studies on bone and antler implements have focused on fishing tools, and comprehensive studies focusing mainly on accessories and ritual equipments are rare. The results of this analysis show that the transition from the Jomon to the Yayoi period was not a break in the traditions that had existed since the Jomon period, but that values based on hunting and fishing continued to function in the Yayoi period, as evidenced by the appearance of new types of vessels that indicated a new social framework.

研究分野：日本先史考古学

キーワード：縄文時代から弥生時代への変遷 骨角製装身具類 社会複雑化・階層化などへの社会変遷

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 一般的に、縄文時代の狩猟採集社会から弥生時代の水田農耕社会への変遷というイメージが強い。動物資源利用体系からみると、狩猟・漁撈に関わった集団は、弥生時代になってどのような位置づけであったのか、一方向の単純な変遷ではない別の説明が必要であった。

(2) 骨角器とされる資料群をみると、狩猟具・漁具・工具などの実用利器と、装身具・儀器等の精神文化や風習・社会性を示す道具(装身具類)、さらには製作途上品や切断された側の素材(製作関連器種)とが混在しており、骨角器の研究主体は、実用利器の中でも漁具が中心であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、骨角製装身具を通じて、縄文・弥生時代の社会階層化および集団関係の変遷の検討を目的とする。

(2) 当時の資源史利用の復元や、型式学的検討により社会集団の復元に迫る。資源史利用に関しては、骨角製装身具類は、当時の動物性素材利用を象徴するものであり、狩猟・漁撈という生業形態およびその素材およびもとの動物に対する信仰や思想性を反映したものと捉えることができる。資料の型式学的分析は、製作時の構造の本質を追究する分析で、ある一定の範型を抽出する作業である。同一の範型の資料を保有する集団が特定された場合、それに共通の価値を見いだす社会集団が存在していたと見ることができる。

(3) 当時の社会における男性・女性のあり方を追求する。考古学の研究においても、ジェンダー研究はしばしば取り上げられおり、日本考古学協会 2019 年岡山大会で「ジェンダー考古学の現在」として分科会が設けられたほどである。人骨着装の装身具類をみると、鹿角製や牙製のものは男性人骨に多く見られ、貝輪(貝製腕輪)などは女性人骨や子供に多い。この素材と共伴する性との関係は、縄文時代研究において、男性は狩猟活動との関連で説明され、女性はかつて成女式などの通過儀礼との関連で説明されてきたこともあった。弥生時代に向かってどのように変遷するかが、注目されるところである。

(4) 当時の隣接した社会集団間あるいは遠隔地の社会集団間の関係を復元する。社会集団間の関係性は、隣接集団間が必ずしも一律に親密な関係性を有している訳ではなく、遠隔地の社会集団に類似した骨角製装身具類の保有が認められることがある。隣接集団で類似の装身具類が認められるものとしては貝輪が代表例である一方、遠隔地の社会集団に類似した装身具類の保有が認められるものは鹿角製のものが代表例である。上で述べたように、前者は女性・子供に、後者は男性に関連したものであり、他集団との関係で見た場合、男性基準、女性基準で見た集団関係は、それぞれ異なるものと考えられるのである。

(5) 動物性素材の象徴とする道具類という一貫した基準で見た場合、これまでいわれていた縄文時代から弥生時代にかけての変遷が地域によって様ではないばかりか、社会階層化のなかで、狩猟・漁撈の担い手が実際にどのような役割を果たしていたのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 個別遺物の検討を推進する。この分析では、素材および、製作と加工方法や加工具の研究を実施するために、できるだけ多くの実資料を直接観察し、検討する必要がある。

(2) 出土状況の分析を行う。この分析では、人骨との共伴状況から、着装位置(部位)の特定されている場合がある。しかし、人骨側から装身具着装・非着装の問題への言及はある一方で、装身具側から人骨着装資料と非着装資料との関係性については、これまで深く追求された研究はない。着装された人骨側の分析・研究も重要であることに加えて、装身具側から見ると、資料の機能・用途の推定に有益な情報となっている。実際には人骨との共伴関係が不明な事例(器種)も多く存在するのである。

(3) 一遺跡あるいは特定地域内の遺物群としての理解を行う。ここでは、各器種および器種を超えた関係を構造的に捉えることにある。例えば、貝輪であれば、素材や最終的な加工の程度によって、ランクが存在していたようであり、時期・地域的にその構造が異なることが予見される。これが当時の共通した志向の社会集団を示していると考えられる。

(4) なお、これら分析を実行する基礎データとして、集成資料の作成を必要とする。

4. 研究成果

(1) 北海道から沖縄県にかけての資料収集を、刊行報告書をもとに実施した。

(2) 縄文時代においては、以下の資料調査を実施した。以下は調査実施順である。佐賀県佐賀市東名遺跡(縄文早期)、石川県金沢市笠舞B遺跡(縄文後期～晩期)、石川県辰口町岩内遺跡(縄文晩期)、石川県金沢市藤江C遺跡(縄文晩期)、千葉県我孫子市下ヶ戸貝塚(縄文後期～晩期)、大阪府藤井寺市国府遺跡(縄文晩期)、福島県新地町三貫地貝塚(縄文晩期)、埼玉県さいたま市馬場小室台遺跡(縄文後期)、岩手県陸前高田市瀬沢貝塚(縄文後期～晩期)、岡山市笠岡市津雲貝塚(縄文時代晩期)、愛知県田原市伊川津貝塚(縄文晩期)、栃木県小山市寺野東遺跡(縄文後期～晩期)、栃木県益子町御霊前遺跡(縄文晩期)、栃木県足利市あがた駅南遺跡(縄文晩期)、千葉県市川市姥山貝塚(縄文中期～後期)、宮城県松島町永根貝塚(縄文晩期)、神奈川県横須賀市吉井城山第一・第二貝塚(縄文早期)、富山県富山市小竹貝塚(縄文前期)、宮城県東松島市里浜貝塚(縄文後期～晩期)、宮城県大崎市北小松遺跡(縄文晩期)、埼玉県春日部市神明貝塚(縄文後期)、岩手県一関市貝鳥貝塚(縄文後期～晩期)、岩手県宮古市崎山貝塚(縄文前期)、岩手県宮古市近内中村遺跡(縄文晩期)、宮城県石巻市沼津貝塚(縄文後期～晩期)、福岡県鞍手町榎坂貝塚(縄文後期)、福岡県鞍手町新延貝塚(縄文後期)、千葉県千葉市加曽利貝塚(縄文晩期?)、東京都大田区下沼部貝塚(縄文後期～晩期)、神奈川県横浜市称名寺貝塚(縄文後期)、千葉県千葉市犢橋貝塚(縄文晩期)、茨城県茨城町小堤貝塚(縄文後期～晩期)、福岡県芦屋町夏井ヶ浜貝塚(縄文晩期)、福岡県宗像市鐘崎貝塚(縄文後期)、宮城県気仙沼市田柄貝塚(縄文後期～晩期)、福島県いわき市寺脇貝塚(縄文晩期)、愛知県豊川市菟足神社貝塚(縄文晩期)、千葉県銚子市余山貝塚(縄文後期)、千葉県船橋市古作貝塚(縄文後期)、青森県階上町寺下遺跡(縄文晩期)、大阪府大阪市森ノ宮貝塚(縄文晩期～弥生前期)、千葉県市川市堀之内貝塚(縄文後期)、千葉県千葉市園生貝塚(縄文後期)、茨城県美浦村陸平貝塚(縄文後期)、富山県氷見市大境洞窟(縄文晩期～弥生前期)、茨城県ひたちなか市三反田蛭塚貝塚(縄文後期)、茨城県稲敷市広畑貝塚(縄文晩期)、岩手県陸前高田市門前貝塚(縄文中期以降?)、熊本県熊本市黒橋貝塚(縄文中期～後期)、北海道洞爺湖町入江貝塚(縄文後期)、北海道洞爺湖町高砂貝塚(縄文晩期)、千葉県茂原市下太田貝塚(縄文中期～後期)。

(3) 弥生時代においては、以下の資料調査を実施した。以下は調査実施順である。大阪市吹田市勝部遺跡(弥生前期)、大阪府東大阪市宮ノ下遺跡(弥生前期)、石川県小松市八日市地方遺跡(弥生時代中期)、岡山県岡山市南方遺跡(弥生前期～中期)、島根県松江市西川津遺跡(弥生前期)、群馬県高崎市新保田中村前遺跡(弥生時代中期)、三重県志摩市白浜貝塚(弥生中期～古墳)、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡(弥生前期)。

(4) その他の時代・時期については、以下の調査を実施した。北海道網走市モヨロ貝塚(オホーツク期)。

(5) 成果のまとめとして、令和5年11月5日(日)に、明治大学で公開シンポジウムを開催した。内容は以下の通りである。川添和暁：趣旨説明および「研究概要および鹿角製装身具類の展開とその意義」、阿部芳郎：「ベンケイ貝製貝輪の大量生産遺跡の出現背景」、中沢道彦：「装身具となったサメ類とその背景」、樋泉岳二：「装身具に使用された動物性素材の特徴」、栗島義明：「石製装身具類の展開とその意義」、山田康弘：「骨角製装身具類を着装・伴出した人骨の埋葬属性」、米田 穰・佐野良彦：「装身具を装着した縄文人の食生活は特殊だったのか?」

(6) 縄文時代後期から弥生時代にかけての鹿角製装身具類を中心に変遷を検討した場合、以下のことが明らかとなった。縄文時代後期においては、山鹿貝塚で見られるように、女性との有機的関連が認められ、西北九州域から中九州域と、東関東地域と離れた両地域で、同様の盛行が認められる。縄文時代晩期では、西日本域では男性との有機的関連が明瞭である。東日本域における腰飾りの展開は、西日本域と異なり、埋葬人骨との共伴関係の認められる事例が著しく少ない。これは、この器種の保有が個人というよりも、最終的には集団に返す(もしくはある役目が終わったら送られる)ものであった可能性が考えられる。しかし、構造上共通している装身具類が予想以上に広く存在していることから、両者は没交渉であった訳ではなく、密に関連している点も明らかとなった。さらに弥生時代に入ると、個人というより集団での保持に有意性が認められる。続縄文期にはクマ意匠をシンボルとした棒状鹿角製品の個人保有もあるが、その意匠は縄文時代晩期後半(中葉以降)には東北地域北部では存在していた可能性が高いと考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 3
2. 論文標題 本刈谷貝塚出土骨角器および関連資料について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 刈谷市歴史博物館 研究紀要	6. 最初と最後の頁 18-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 15
2. 論文標題 南方遺跡出土の鹿角製儀器について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山市埋蔵文化財センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 24
2. 論文標題 九州地域の縄文時代貝輪について_東海地域からの視点	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 研究紀要	6. 最初と最後の頁 59-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 3
2. 論文標題 弥生時代のサメ歯鏝_長崎県五島市白浜貝塚出土資料について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 列島の考古学	6. 最初と最後の頁 291-301
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 75-4
2. 論文標題 岩手県一関市蝦島貝塚（貝島貝塚）第2次調査出土装身具類について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 15
2. 論文標題 南方遺跡出土の鹿角製儀器について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山市埋蔵文化財センタ研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 4
2. 論文標題 本刈谷貝塚出土骨角器および関連資料について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 刈谷市歴史博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 18-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 8
2. 論文標題 枯木宮 昭和48年調査時出土の骨角製装身具類について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 新編西尾市研究	6. 最初と最後の頁 97-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 1
2. 論文標題 朝日遺跡二反地貝塚地点出土骨角器について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 あいち朝日遺跡ミュージアム研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 21
2. 論文標題 山形県東根市蟹沢遺跡出土骨角器について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究紀要	6. 最初と最後の頁 77-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川添和暁	4. 巻 4
2. 論文標題 秋田県柏子所貝塚出土骨角製装身具類について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西縄文論集	6. 最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 川添和暁
2. 発表標題 弭形鹿角製品について
3. 学会等名 日本動物考古学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川添和暁
2. 発表標題 研究概要および鹿角製装身具類の展開とその意義
3. 学会等名 シンポジウム 縄文/弥生の骨角製装身具類の展開とその意義;骨角製装身具類からみえる社会変遷
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川添和暁
2. 発表標題 骨角製儀器からみた文様の関係性とその意義
3. 学会等名 土偶研究の新展開_資源利用史と土偶祭祀_(明治大学資源利用史研究クラスター研究成果公開シンポジウム)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 川添和暁
2. 発表標題 土器施文・調整具としての貝工具について
3. 学会等名 日本動物考古学会第9回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川添和暁
2. 発表標題 骨角器製作からみた手工業生産專業化について
3. 学会等名 第3回考古学研究会合同例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川添和暁
2. 発表標題 縄文時代後晩期における骨角製装身具類について 西日本域を中心に
3. 学会等名 関西縄文文化研究会オンライン9月例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	阿部 芳郎 (Abe Yoshiro) (10221730)	明治大学・文学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	樋泉 岳二 (Toizumi Gakuji) (20237035)	明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員 (32682)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------